

再考「『市場社会』としてのイスラム社会」

加藤 博 (一橋大学)

上海ワ - クショップでの質疑応答

"Development and Culture in Asia" をテーマとしたワ - クショップで、アメリカ人の研究者が"The New Market Culture of Egypt"と題された発表をおこなった。80年代以降の開放経済体制下におけるエジプトの消費文化を論じたものであった。発表後、即座に中国人の研究者から、「あなたが論じるエジプトの消費文化の一体何が新しいのか」との質問が出された。おそらく、この質問に対する答えを探ることが、この「市場研究会」の目的であろう。この質問と全く同じ主旨の中国人研究者の発言が、参考文献 (114 ペ - ジ) で紹介されている。

「市場経済」「資本主義」の定義

概念の定義については、関本問題提起の趣旨から外れないようにしたい。「市場経済」「資本主義」については、ウェ - バ - 、マルクス、プロ - デル、ヒックスなどに言及しつつ、自分の考えを述べなければならないのであろうが、ここでは次ぎの二点だけを確認するだけにとどめる。第一は、原 (参考文献 91-145 ペ - ジ) が指摘する二つの市場観のどちらに依拠しているかが、かれらの概念定義を整理する最も重要なファクタ - である、ということである。二つの市場観とは、規範主義的・機械論的・非歴史的市場観と経験主義的・関係論的・歴史的市場観である。そして、第二は、この市場観の違いがまた、かれらの「市場経済」の時代区分と深く結びついている、ということである。

「市場経済」の時代区分

規範主義的・機械論的・非歴史的市場観に立つ論者 (ex. ウェ - バ - 、プロ - デル) は、「市場経済」と「資本主義」を異なる概念と区別し、「資本主義」を「市場経済」つまり「交換経済」と非経済的 (政治的、社会的) 要素とが結合した政治経済体制であると考え、これに対して、経験主義的・関係論的・歴史的市場観に立つ論者 (ex. マルクス、ヒックス) は、「市場経済」と「資本主義」を異なる概念とは考えず、「市場経済」の延長上に「資本主義」を定義する傾向をもつ。そして、この「市場経済」と「資本主義」の定義の違いが、「市場経済」の時代区分、つまり近代を境に経済史を連続的にみるか、断続的にみるかの違いと深く関わっている。

関本問題提起における時代区分

いつをもって近代を開始させるかという大問題はある。しかし、近代を境に経済史を連続的にみようと、断続的にみようと、論点を整理するため、近代の前後で時代を前近代と近代に分けることは必要な手続きであろう。関本問題提起では、前近代と近代の「市場経済」を次ぎのように定義している。

前近代 ロ - カルな地域的市場 + 遠隔地交易

近代 資本主義的市場経済

なぜ議論を「ロ - カルな地域的市場」から出発させなければならないのか

ここでの議論は、あくまでもイスラム世界への適用の是非をめぐってのものである。私の関心は一般理論にはなく、イスラム世界の「市場経済」をうまく説明できる理論だからである。この限定を付したうえで、上記「市場経済」の時代区分にみられる理論的な前提について批判を加えたい。それは、一言で言えば、なぜ「市場経済」の歴史を「ロ - カルな地域的市場」から議論を出発させなければならないのか、への疑問である。このことは、結局のところ、「農業優位の理論」批判に行き着く。

なぜ、私がこのような疑問を抱いたかは、イブン・ハルドゥ - ンの都市論（参考文献 202-233 ペ - ジ、参考文献 81-84 ペ - ジ）を知るだけで十分であろう。そこでは、都市が技術と貨幣の蓄積でもって定義されたうえで、商品のみならず、労働力、技術の巨大な「市場」とみなされている。興味深いことに、このイブン・ハルドゥ - ンの都市論とほとんど同じ議論が、現代の経済学者によってもなされている。それは、ジェ - ン・ジェイコブスの都市論（参考文献 1-98 ペ - ジ）である。そこで彼女は、多くの分野 - 経済学、歴史学、人類学 - で流布している、農村経済を基盤にして都市が成り立っているとの理論を、農業優位のドグマであると弾劾し、「初めに都市ありき - そして農村が発展する」とする刺激的な議論を展開している。

再考「『市場社会』としてのイスラム社会」

私は、参考文献 と において、ヒックスの『経済史の理論』（講談社学術文庫、1995 年）に依拠しつつ、「『市場社会』としてのイスラム社会」を論じた。それは、経験主義的・関係論的・歴史的市場観に立ち、広義の制度の存在があって始めて、健全な市場の運営のみならず市場そのものの存在が保障される、と主張する制度の経済学に従うならば、前近代のイスラム社会は市場社会としての性格を十分に備えていた、と主張するものであった。そこで取り上げられた制度的要因とは、市場がその積み重ねから成り立っている個々の経済取引そのものを可能にさせている「財産の保護」と「契約の保護」であり、具体的には、「貨幣の使用」「法の整備」「信用の確立」であった。

ところで、シリア史家、ブル - ス・マスタ - ズは北部シリアの商業都市アレppoをテ - マとした著書（参考文献 ）のなかで、なぜ17、18世紀に、ヨ - ロッパ世界はイスラム世界との経済関係において決定的に優位に立つようになったのかを、「重商主義」と「イスラム経済」という二つの経済システムの対抗のなかで論じている。その議論は、私が先の二つの参考文献のなかで展開したイスラム社会経済論と理論枠において通底している。そこで、私の報告の最後に、おそらくこれまでと同じ議論の繰り返しになるであろうが、ブル - ス・マスタ - ズが提起した問題設定を取り上げ、そのなかで、イスラム社会の「市場社会」としての性格をもう一度考えてみたい。

参考文献

- 加藤 博 『文明としてのイスラム』(東京大学出版会、1995年)
- 同 「『市場社会』としてのイスラム社会」(『社会経済史学』第63巻2号、1997年)
- 同 「アレクサンドリアの憂愁 - 近代地中海世界の光と影」(歴史学研究会編 『地中海世界史3 ネットワ - クのなかの地中海』青木書店、1999年)
- 同 「イスラム社会における法と経済 - 所有システムの観点から」(法文化学会 『叢書 法文化 - 歴史・比較・情報』第1号、近刊予定)
- 岸本美緒 「コメント - 中国史から」(『社会経済史学』第63巻2号、1997年)
- ジェイコブス、ジェ - ン 『都市の原理』(鹿島出版会、1971年)
- 原洋之介 『アジア・ダイナミズム - 資本主義のネットワ - クと発展の地域性』(NTT出版、1996年)
- 深沢克己 「レヴァントのフランス商人 - 交易の形態と条件をめぐって」(歴史学研究会編 『地中海世界史3 ネットワ - クのなかの地中海』青木書店、1999年)
- Masters, Bruce, The Origins of Western Economic Dominance in the Middle East. Mercantilism and the Islamic Economy in Aleppo, 1600-1750, New York Univ. Press, 1988
- Steensgaard, Niels, The Asian Trade Revolution of the Seventeenth Century. The East India Companies and the Decline of the Caravan Trade, The Univ. of Chicago Press, 1973